季刊誌 ひらかれた劇場へ。
神奈川芸術劇場

KAAT PAPER

モノ・人・まちをつくる
創造型劇場KAATの広報紙

秋 2022

特集 長塚圭史、「忘」を歩く。

対談
「記憶のメカニズムとは？」
脳科学者 中野信子 × 長塚圭史
「忘れず記憶する、忘れられたことを掘り起こす演劇の力。」
ジャーナリスト 金平茂紀 × 長塚圭史

●「冒」から「忘」へ。 ●「忘」街歩き in 横浜 ●REVIEW
●KAATな人の行きつけ ●長塚圭史の思いつき
●ただいま、KAAT準備中
●神奈川へ、会いに〈協同組合 元町エスエス会〉
●公演スケジュール

特集

長塚圭史、「忘」を歩く。

2022年度のKAATメインシーズンタイトル「忘」。長塚芸術監督は、「多くの情報量のなかで生きている私たちは、日々何かを忘れていく。人間は大切なことも忘れてしまうが、そうすることで前に進めることもある。今僕らが歴史のどこに立っているのか、『忘』という言葉を通して見つめたい」と語ります。今号では、記憶や脳のメカニズム、社会情勢などさまざまな視点から「忘」について掘り下げます。

「冒」から「忘」へ

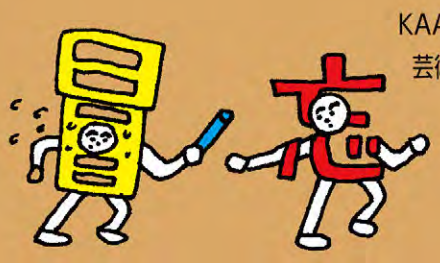
芸術監督に就任して2年目になりました。初年度はコロナ禍に直面し、すべての計画が予定どおりに実現できたわけではありません。多大な困難もありましたが、あらためて上演することの喜びを感じた1年でもありました。2年目は初年度に立ち上げたことを力強く動かす1年にしていきたいと思っています。

まずは劇場をひらくこと。昨年度は『冒険者たち ～JOURNEY TO THE WEST～』で神奈川県内を横断するツアープロジェクトを行ったり、KAAT PAPERでも、地域の皆さんにお会いして、歴史に耳を傾けたり、僕らはここで何ができるのかを考え、少しずつ劇場と地域との関係を構築してきました。舞台芸術は社会と密接に結びつきます。生活のなかにある劇場を目指し、それを具体的にかたちにしていこうと思っています。

そして、「カイハツ」プロジェクト。演出家、脚本家、俳優たちがアイディアを膨らませて、新しい表現を試みたり、新しい才能が発掘されたり。すぐに結果が出るものではなくとも、将来的にこの取り組みはKAATの財産になるはずです。

さあ、今年もメインシーズンの開幕です。タイトルは「忘」。1年目の冒険の「冒(ぼう)」から、忘却の「忘(ぼう)」へ。私たちは歴史のなかに生きています。歴史の視野に立ち、過去に遡れば、自分たちが現在どこに立っているのかが見えてきます。例えば日本の近代史を知ることは世界史を深く理解する足がかりになります。大量の情報にあふれた現代社会は、ものすごいスピードで進み、1ヶ月前の紛争は昔のことになる。日々不都合なさまざまな事柄を忘れていく一方、忘れることは毎日を生き抜く人間の逞しい能力でもあります。劇場はいっときの夢のなか、現実からしばし離れ、明日への活力を得る滋養の場であり、また、忘れてはいけないことをあらためて見つめ直し、自分たちの今立っている現在を知るための場ともなります。KAATの「忘」シーズンが、少しでも皆さんの生きる活力になってくれることを心から願っています。

KAAT神奈川芸術劇場
芸術監督　長塚圭史



対談

脳科学者 中野信子 × KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督 長塚圭史

記憶のメカニズムとは?

新シーズンのタイトル「忘」とは、あらゆる角度から忘却の意味を考えてみようという長塚芸術監督からの提案でもあります。今回は、科学の視点から人間関係や歴史・文化を解き明かし、今年は森山未來さんらとの異色のコラボ公演にも取り組む脳科学者の中野信子さんをお迎えしました。横浜市民だった時期も長く、KAATにもよく訪れたことがあるという中野さんと、「忘れる」ことや、芸術が記憶や感情に与える影響について語り合います。

文＝齊藤真菜　写真＝山本康平

人間関係を円滑にし、生き延びていくための「忘」。

長塚　今日、中野さんに伺ってみたかったことの一つが、「人はなぜ忘れるのか」ということです。

中野　2014年のヨコハマトリエンナーレのテーマも「忘却」でしたね。「華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」。焚書が行われる小説『華氏451度』は、すごく好きなストーリーです。

長塚　僕も『華氏451度』は大好きです。僕らは戦後の歴史の上に立っているのにもかかわらず、大切な歴史もすっかり忘れながら生きていくじゃないですか。この忘れるメカニズムについて伺いたいなと。

中野　例えば、覚えることを機械に実装するのは簡単ですよね。逆に、都合のいいことだけ忘れる機能って、すごく難しいと思いませんか。

長塚　難しいですね。

中野　プログラミングでそれをやろうとしたら、やりとりしているコミュニケーションの相手、内容、文脈に応じて、重率をきめ細やかに計算して情報に乗じて設定するのは難しい。例えば「なかったことにする」ということを特に我々日本人はよくやりますが、それは情報そのものよりもコミュニケーションを重視しているためですよね。今目の前にある人間関係の方が、記憶よりも重い。そのために「ここは水に流して」と目くばせされたり、いつまでも何か覚えていることの方が「器が小さい」と言われたりもする。元々遺伝的に何かあるというよりは、社会関係資本の方が記憶の資本よりも大きい、という構造のなかに生かされていることの表れかなと思っています。

長塚　今、『ライカムで待っとく』という舞台の上演に向けて、沖縄で生まれ育った兼島拓也さんという若い劇作家に沖縄について書いて頂いているんですが、彼のまわりでもそのこと（歴史）を前提に話していると日常的なコミュニケーションが進まないので、距離を置いて生活していると聞きました。今回、劇場から生まれ育った沖縄の歴史と向き合うお題を出したことになって、兼島さんから「僕らにこのことを考えさせるとはどういうことなのか」と逆に問われています。「忘れる」習性は遺伝ではない

とおっしゃっていましたが、国民性とは何か関係がありますか？

中野　日本人が元々成立の初めから忘れる知恵をもっていたわけではなく、そうならざるを得ない地理的な、あるいは社会的な条件があったために形成された何らかの形質が今も効いている、と考えるのが妥当だと思うんです。日本は島嶼国（とうしょこく）であるうえに平野部が少なくて、村落共同体から別の共同体へ移動することが大きな平原をもつヨーロッパなどと比べると困難ですよね。共同体内でまずいことが起きた場合、それを何とかするためには徹底的に議論して打開策を見つけるよりも、なかったことにする方が禍根も少なく、当座の解決も早い。生き延びていくための知恵として、文化的に、議論を戦わせるよりも忘れる知恵の方が発達してきたんだと思います。

忘れてきたことの弊害。

中野　ヨーロッパ人たちは忘れることをあまりよい方法ではないと捉えている節があるようです。むしろ、違いや衝突があることが当然と考えていて、それをよりよいものを生み出すための種にしようとするんですよね。もちろん、すべての人ではなく、傾向としてより多い印象をずっともっています。ドイツ人とユダヤ人が机を並べなきゃいけないような環境もあります。以前、超正統派といわれるユダヤ教徒の結婚式に出たことがありますが、彼らの結婚式ではグラスを叩き割る儀式があるんです。約2,000年前にエルサレム神殿が破壊された悔しさを忘れないためだというんです。衝撃的な光景です。何千年にも及ぶ歴史の記憶を忘れないように生きてきたこの人たちと、私たちは極めて対照的な「忘れる国の民」なんだな、ということを強く感じました。

長塚　日本では第二次世界大戦に敗戦するまでの全体主義傾倒から崩壊という流れのなかで、何かが一回崩壊してしまったのではないかという思いがあります。

中野　日本の伝統として本質的なところで無意識に継承してきている部分と、伝統であると「思わされている」部分と、記憶も実は複雑なレイヤー構造になって重なり合っていますよね。例えば、日本の家族制度も、父と母と子、という核家族型ってまったく伝統的ではないのですが、そのように「思わされている」。私たちは日本に住んでいて日本人的な特徴を示すDNAをもっているけれども、元来もっていたものを忘れさせられた、“新しい日本人”の皮を一枚かぶっている気がしています。一方で議論をする伝統もなければ、違うものと手を結ぶ伝統ももっていない。対話なんてどうしたらよいかわからない、この先どうなっていくのか、というところに立たされているのが現状なのかなと。

長塚　そのとおりだと思います。歴史を認識することでしか、自分がどこにいるのかを明らかにすることはできないと、僕は考えていました。だからこそ今回、戯曲に取り組むにあたって、戦中・戦後のテーマにグッと傾倒したのだと思います。

“記憶”と“感情”の関係。

長塚　忘れないためには、どうしたらよいのでしょうか。少し脱線に近いですが、単純に演劇関係の読者のためにもお聞きしてみたくて。セリフを覚えるのって非常に苦しい仕事なんです。

中野　それは役者さんからも本当に頻繁に聞かれる質問です（笑）。一定の割合で忘れるのはもう仕方ありません。長期記憶のうち言語化できるものには2種類あって、「意味記憶」と「エピソード記憶」です。このうち、「意味記憶」は忘れやすい。一方、「エピソード記憶」は忘れにくい。自分が体験したこと、目撃したことを事実の羅列として覚えるのではなく、感情を伴った出来事として体験したかのように覚える。そうすると忘れにくいんです。ただ、感情を伴うといっても、楽しい感情と一緒の記憶というのはいまいち定着しづらいようで、書き換わってしまうこともあります。例えば、あの時あの素敵なカフェに一緒に行ったのは結婚前に付き合っていた彼女だった。でも、記憶がいつの間にか書き換わっていて、奥さんと行ったことになっているとか。対照的に、嫌な記憶は忘れたくてもあまり忘れられません。いじめられた側は覚えていて、いじめた側は忘れてしまうということもしばしば聞きますよね。ユダヤ人の結婚式では、おめでたい席なのにどうしてグラスを割るような激しいことをするのかと一瞬驚きましたが、過去の人たちの痛みを忘れないために、わざわざそれを追体験させる、認知の装置の一つとして工夫された仕組みなのだと考えると非常に納得がいくんです。学習能力の高い学生も、自分で自然にそういうことをしていたりします。例えば、歴史を学ぶ時、年表を機械的に覚えるのではなく、あの時奥さんと一緒に自害した柴田勝家はどういう心情だったかなどと、感情を想像しながら覚えると忘れにくくなると思います。

長塚　僕らが覚えるセリフは、エピソードでできているキャラクターのものです。いやいや、これは愚問でしたね。

中野　感情移入しにくいキャラクターだったりすると、覚えにくいということもありますかね……。個体として、メンタルを守るために嫌な記憶を忘れるということには一定の価値がありますが、共同体としての生存を維持し、リスクを回避するためには、やはり記憶を継承していくことは重要な意味があります。祭りや演劇、文化が発展してきたのはそういう部分に対する寄与への期待があるのではないかと思っています。今は非常に安価に本が手に入るし、インターネットで情報を得られる時代ですから、記憶は勝手に継承されていくと多くの人が思っていると思いますが、そんな時代は歴史を遡れば数十年、長く見積もっても数百年しかなかったわけです。人々が文字を読めない時代の方がよっぽど長かった。どちらかといえば、身体の動きや声、表情などを日常的に使って伝えてきたのが、人類の歴史であったはずなんです。

長塚　まさに芝居は体感することで自分以外の視界を手に入れることができて、一気に世界が豊かになるし、他者を慮ることができるようになるはずなんですよね。震災をテーマにした劇を観るということも、それにつながるものがある気がします。

思い出すことで癒やす。

中野　（震災の後に被災地の子どもたちがしていた）「津波ごっこ」は本当に象徴的だなと思います。自分に起きた嫌なことを何度も反芻することによって、あの時の出来事を自然に意味づけし、傷が癒えていくという効能もあるわけですよね。

長塚　僕は昔ひどい失恋をした時つらすぎて、よかった頃をずっと思い出すことにしたんですね。それをして、やっと元の自分に戻れたという経験があります。

中野　まさにそういうことなんですよ。欧米文化圏のなかで、ナチス時代を書籍化したり映画化したものは幾度も繰り返しつくられています。深刻なテーマですが、やはりつくらずにはいられないほど傷が深いんだと考えると納得できるんです。私は、クリスチャン・ボルタンスキーがとても好きなのですが、彼もユダヤ系の血を引いているので、そういうテーマが作品のなかに随所に表れ出てきます。作品にすることで彼自身の傷を癒やし、またそのなかで、同様の経験をした人々を同じように癒やしていく、そういうプロセスを繰り返しているのではないかと。演劇もまた、自分の癒やされていくプロセスをシェアするような、内的な体験に影響を与えていくという意味では、極めて価値のあるものだと思います。

長塚　面白いですね。僕は戦争や原子爆弾を繰り返しテーマにします。僕自身は戦争を体験しているわけではないですし、広島出身でもありません。でも、小学生の頃に原爆の資料を授業で何度も見せられたことで、この歴史からは決して目をそらしてはいけないという気持ちが強く根づいているんです。

中野　原爆の話や悲しい物語は、言い方が難しいのですが、忘れてはならない記憶として見る一方で、怖いものを見ておかなければ、という根源的な欲求もかなり強くあると思います。私たちはどうして終末的な光景を見たいのかという命題について実験もなされています。コロナ以降に行われた実験ですが、映画の終末モノを好む人たちとそうでない人たちの行動傾向の違いを分析しています。終末モノを好む人たちは、より日常的にマスクをする、食料備蓄をする、デマに騙されにくい、災害に対する適応力が高いという傾向が見られました。もしかしたらこれは、できるかもしれない自分の傷を予測しておいて、予防的に耐性をつくっておく、現実にそれが起こる前にリハーサルをしておいて、あらかじめその傷を癒やしておく。そうすることで、本当に災害が起きたときに生き延びやすく、その個人を守る機構をつくっておくことになっているんじゃないかと。どんなに大変な目に遭っても、何とか生き延びるためのワクチンのようなものですかね。その一つとして“虚構としての悲劇”が必要だ、ということかもしれません。

長塚　すごいですね。

中野　つくり手は直感的に悲劇やとても暗い話をつくることも多いですよね。でもそれが我々、人類共同体として、生き延びる意味につながっていることを、つくり手本人から明確に示すのはなかなか難しいと思うので、この実験はそれを補強するためのよい材料になるんじゃないかと思います。

長塚　今、この場では話しきれないな……。自分がこれまでやってきたことの意味づけをもっと細かく確認したいくらいです。

中野　また横浜で会いましょう。

長塚　ぜひ。今日は本当にありがとうございました。

中野信子

脳科学者。医学博士。東日本国際大学教授。1975年東京都生まれ。東京大学工学部応用化学科卒業。東京大学大学院医学系研究科脳神経医学専攻博士課程修了。フランス国立研究所ニューロスピン（高磁場MRI研究センター）に勤務後、帰国。脳や心理学をテーマに研究や執筆の活動を精力的に行う。科学の視点から人間社会で起こりうる現象及び人物を読み解く語り口に定評がある。現在は東日本国際大学教授／京都芸術大学客員教授を務めている。2022年7月より森美術館理事。

対談

金平茂紀（ジャーナリスト） × 長塚圭史（KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督）

忘れず記憶する、忘れられたことを掘り起こす演劇の力。

新シーズンタイトル「忘」には、忘れられない、忘れてはならないという意味が込められています。本対談では、『筑紫哲也NEWS23』の番組編集長、『報道特集』キャスターを務め、国内外の社会情勢を見つめてきたジャーナリストの金平茂紀さんをお迎えし、社会と舞台芸術のつながりについて長塚芸術監督と語っていただきます。舞台もこよなく愛する金平さんが、長塚芸術監督に投げかけたこととは？

文＝伊達なつめ　写真＝五十嵐一晴

金平　僕、ここ（KAAT）からわりと近いところに住んでいるんですよ。一番多く来ているのは、ダンス公演の時かな。

長塚　そう伺いました。

金平　僕は舞踏の土方巽を観た最後の世代で、3月の黒田育世さん（演出・振付）の『病める舞姫』は、あの土方のとんでもない原作をよくぞダンスにするなあ、と思いながら観ました。いやあ、すごい舞台でした。ダンスでは、世田谷パブリックシアターで観たピーピング・トムも、めちゃくちゃ面白かったなあ。

長塚　ベルギーのダンス・カンパニーですね。圧倒的な身体ですよね。

金平　かっこいいですよね、度肝を抜かれたなあ。ピカレスク系[※1]の演劇も好きで、ここで観た『アルトゥロ・ウイの興隆』（2020年・2021年）なんか、ここまで酷いことをするかという、黒光りするような悪党が出てきて好きなことをしていて、こういうのを観ると、終わって劇場を出る時に力をもらった気分になるんですよね。KAATも世田谷パブリックシアターも、公立劇場でしょう。僕のいる報道の世界は、「公正中立」の名の下に、ものすごく不自由を強いられる規制のなかで仕事をしているようなところがあるんですよ。だから、こうした自由な表現が、演劇のなかではまだ可能なんだと思うと、うれしくなります。お客さんもびっくりするような、自由な発想の作品をつくる人がいて、それを上演しようとする劇場があって、そこに観客が詰めかけて、つくる側観る側、その場にいるみんなで共有する。この感じがすごくうれしくて、元気になるんです。例えば、被災地のことを考えたり、戦地や難民になった人たちの取材をしていると、発作的に、まったく違う分野のこういうものを観たくなるんですよね。そして励まされる。全然違うといっても、じつはあらゆる仕事に共通しているものがそこにはあって、大きな発見をしたり、度肝を抜かれたりして、それが次の仕事をしていく時の糧になる。むしろ一見無関係だったり、距離があったりする方がいいんです。

長塚　金平さんは、お忙しいのに、本当によく劇場に足を運ばれますよね。どうしてそんなにダンスや演劇を観ることを大事にしてくださるんだろうと思っていたんですが、そういうことだったんですね。

金平　僕は基本的にミーハーなので、意味なく発作的に観ているだけ。いろいろ言ったことは後づけですよ。何かわけのわからないものが観たいという、好奇心が残っていてね。それに、凄まじい取材の後などは、本当に落ち込んでしまうので、困っている人たちのことを考える一方で、「好きなものを好きな時に観る」ということをしていないと、バランスがとれなくなるんです。精神的な飢餓状態に陥るというのかな。まあ社会的なミッションばかりでは生きていけないのは、皆さんも同じでしょう。

長塚　やっぱり、金平さんが激烈に生きているということも、多分にあると思いますよ。

金平　激烈じゃないですよ（笑）。

長塚　でもいろいろな場所に取材に行って、現実に直面したり、人を見つめたりする、その活動の豊かさや激しさによって燃焼し、飢餓状態が訪れて、生の舞台を観たいという欲求につながるんだと思いますよ。そうやって劇場に足を運んでくださるお客さんは、僕らにとって本当に大切ですし、いかに自分たちが観客の皆さんに支えられているかを、コロナ禍でより痛感するようになりました。無観客配信などもやりましたが、劇場を再開してからは、あらゆる感染症対策をしながら、お客さんを入れるということに、ものすごく力を入れています。やっぱりそこなんです。観客がいなければ成立しない。この劇場で働くことになった時に、どうやって一般の方々に、劇場というところがあって、そのなかに入ると、金平さんがおっしゃったような、特別な体験ができたり、自分の生活時間のなかに貴重な点が生まれる、ということを伝えていこうかと考えたんですが、そこをあらためて見つめ直していこうと思っています。

金平　コロナ禍は、そういうことを突き詰めて考えさせられる、ある種の原点回帰みたいな機会になったのかなと思いますね。僕らの場合は「コロナだから取材に行くな」と言われて、考えましたもんね、「なぜ自分たちはこの仕事をしているんだろう」と。それにオンライン・インタビューの時でさえ、日本の規則だからとマスク着用を強いられたりするんですよ。相手とのコミュニケーションを伝えるのが僕らの仕事で、お互いの顔の表情の変化を見せるのは、重要なことなのに。そう考えると、舞台関係の方々は、本当に大変だったと思います。観客にとって生の舞台を観られる贅沢さは、やはり何ものにも代えがたい。全部無観客の配信でいい、なんてことになったら、僕らの身体能力も低下するし、感覚も劣化することになると思いますよ。

長塚　そうですね。例えば生でダンスを観ていると、自分の身体も踊らされているような感覚になることがありますよね。映像だとそれを感知しにくくなって、冷めた目で観てしまい、頭でわからなきゃいけないと思ったりして、つまらなくなった経験が僕にはあります。やはりできれば劇場に足を運んでもらい、自分の身体が踊らされているような、忘れがたい体験をしていただきたいんです。

金平　今日、ぜひお伺いしたいと思っていたのは、今シーズンの年間テーマ「忘」についてです。僕らの仕事は「忘れてはいけない」ということが基本。例えば今僕が関わっていることでは、沖縄が今年「復帰」50年で、非常に大きな節目を迎えています。きっと2022年という年は、沖縄にとってターニングポイントだったと、今年が終わる頃にはみんなが実感するのではないかと思っています。こうして、忘れられそうなものを忘れないように積み重ねていったり、忘れられていたものを掘り起こしていくのが、僕らに与えられた責務なので、このテーマはとても興味深いんです。

長塚　劇場という存在を知ってもらうためには、そのなかに季節感やリズム感があることが欠かせないと思い、4月から8月はプレシーズン、9月から半年間をメインシーズンにしようと決め、毎年タイトルをつけることで、言葉で劇場をプロモーションしていこうと、テーマを掲げることにしたんです。1年目が冒険の「冒」で、2年目の今年が忘却の「忘」。忘却というのは、大きな普遍性をもつものだと思います。忘れることは必ずしもマイナス面だけではなく、厳しい生活を忘れて生きていくための力にもなるし、おっしゃるような、「遠ざかる戦争」を忘れないという想いも込めています。僕らは戦争に敗北した後、社会構造をしっかりと見つめることなく、今日まで何となく生きてきてしまっているところがあります。そのことへの強い違和感があって、日本が占領されていた時期があったことを思い返す機会をもちたいと考え、設定したテーマでもあります。僕自身の演出作品としては、溝口健二監督の『夜の女たち』を舞台化することにしました。1948年の時点でなお、アメリカの占領下で、夜の街に立つ女性たちがいた。みんなで国を信じて戦ってきたのに、戦争に負けたことで、生活だけでなく脳みそまでひっくり返されたあの時代の不安は、現在までつながっています。また、沖縄在住の兼島拓也さんには、若い世代による沖縄からのメッセージとして『ライカムで待っとく』という作品を書いてもらいました。忘れるということの重さ。今年2月に起きたウクライナ侵攻のことでさえ、当初はあんなに緊張感のただ中にいたのに、もう薄ぼんやりしてきているのが現実ですから。

金平　忘れるんですよね。本当に、恐ろしいことだけど。特に今言われたような負の歴史は最初に消されますから。国として都合が悪く、忘れ去られてしまったことを、戯曲として甦らせるのは、とても刺激的なことだと思います。僕は『人類館』※2という戯曲を思い出しています。沖縄についても、みんなあまり口にしないけど、基地の島であるという事実は、戦後一貫して変わらない構造として続いている。『ライカムで待っとく』には、そうしたなかで生きてきた人たちのことが描かれていて、読んでいて切なくなりました。

長塚　兼島さんは沖縄で劇団をやりながらラジオドラマの脚本なども書いているんですが、彼自身が沖縄という、自分の暮らしている街の歴史について、ここまで徹底的には見つめていなかったということもおっしゃっていました。

金平　何から何まで、全部引き受けるということができないんですよ、人間は。過去のことに引きずられながら生きるしんどさを思うと、悲しいことは忘れて生きるのが現実的。でもどこかで「これだけは忘れてはいけない」という想いは、世代を問わず共有されていると感じます。僕は毎年6月23日の沖縄慰霊の日の式典は、日本にいる限りは必ず行っているんですが、平和の礎(いしじ)が建てられたあの場所とあの日はやはり特別で、人々の表情を見ても、「忘れない」という想いが伝わってきます。そういえば先日、NHKワールドでウクライナから30年前に来日し、現在は沖縄で暮らしている女性のドキュメンタリー『Where We Call Home』を見たんですが、そのなかで、彼女が今攻撃されている故郷の黒海沿岸の地オデーサを思いながら、沖縄の海辺で三線を弾き歌うシーンがあったんですよ。8,000キロ離れたウクライナで今起きていることと、かつて沖縄で起きたことが、一瞬にして結びついた、その衝撃。見ていてびっくりしましたし、ある種、神聖な気持ちにまでなりました。こういう、イマジネーションの広がりがあるものなんだなと。年間テーマというのは、おそらく「旗を立てる」ということですよね。「忘」という旗の下に、イマジネーションを解放して、逆説的なものまで含めて多様なアプローチを試みるというのは、可能性としてすごく面白いことだと思います。

長塚　ありがとうございます。そうですね、いろいろな可能性、それこそ「自分の本性そのものを忘れる」ということまで含めて、さまざまな「忘」を探っていきたいと思っています。

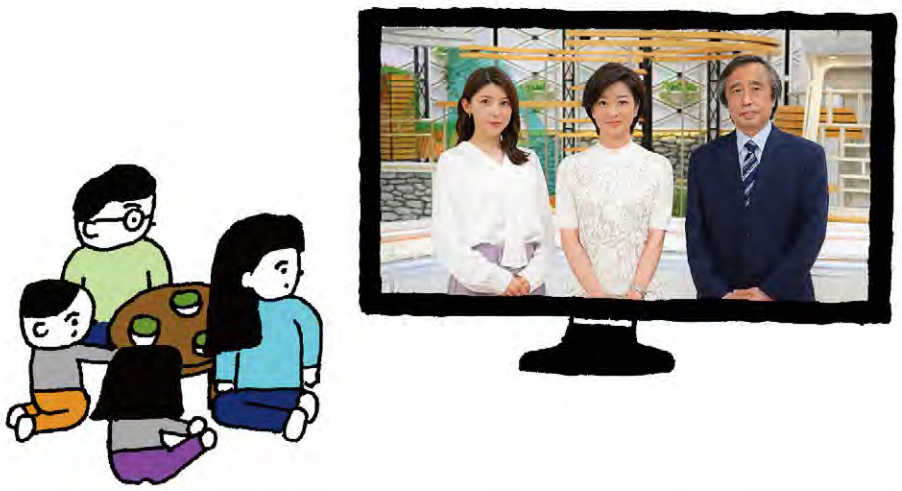
2022年3月16日、ベラルーシの首都・ミンスクで市民にインタビューを試みる。

※1 ピカレスク系……語源であるピカロ(picaro)は、暴力的ではなく、ユーモアも備えた、ずる賢い、ペてん師、小悪党の意味。16世紀～ 17世紀のスペインでは、ピカロを主人公にした小説形式「ピカレスク小説」が流行し、悪漢小説や悪者小説、ピカレスクロマンとも呼ばれている。

※2『人類館』……1903年に、大阪万博で起こった「人類館事件」をモチーフに、沖縄近現代史が描かれた、知念正真による戯曲。

金平茂紀

ジャーナリスト。テレビ局の記者、ディレクター、キャスター。1953年北海道生まれ。東京大学文学部卒。1977年、TBSに入社、報道局モスクワ支局長、『筑紫哲也NEWS23』担当デスク、ワシントン支局長、報道局長、コロンビア大学客員研究員などを経て、2010年より『報道特集』キャスター。2004年、ボーン・上田記念国際記者賞受賞。2022年、FCCJ=日本外国特派員協会の報道の自由賞受賞。著書に『二十三時的』(スイッチ・パブリッシング)、『沖縄ワジワジー通信』(七つ森書館)、『白金猿』(かもがわ出版)、『筑紫哲也『NEWS23』とその時代』(講談社)など多数。



「忘」街歩きin横浜

Part 1

開港とともに欧米文化を吸収してきた横浜エリアには、今も多くの歴史的建造物が残されています。今回はKAAT周辺にある歴史を感じるスポットを紹介。公演の前後に、当時の横浜の情景を思い浮かべながら立ち寄ってみては。

横浜市平和祈念碑

1941年から1945年に起きた、横浜大空襲(日本軍の米国真珠湾軍港に対する奇襲攻撃)の平和祈念碑。犠牲者たちの平和のメッセージを後世にも伝えるべく、遺族や心ある市民の協力を得て建立された。

出典:総務省ホームページ
(https://00m.in/vsZWo)

情報元:横浜戦災遺族会

〒231-0058
神奈川県横浜市中区弥生町4

横浜三塔
(キング・クイーン・ジャック)

昭和初期に建てられた、神奈川県庁本庁舎(キング)、横浜税関(クイーン)、大正期に建てられた、横浜市開港記念会館(ジャック)の総称。象徴的な洋風建築。横浜港に入港する船員の間で、航海の安全を祈るシンボルとなった。

神奈川県庁本庁舎(キング)
〒231-8588
神奈川県横浜市中区日本大通1

横浜税関(クイーン)
〒231-8401
神奈川県横浜市中区海岸通1-1

横浜市開港記念会館(ジャック)
〒231-0005
神奈川県横浜市中区本町1-6

神奈川県庁本庁舎※
(キング)

横浜税関
(クイーン)

横浜市開港記念館
(ジャック)

※保存改修工事のため休館中。(2024年3月末まで)　©横浜観光情報

「忘」街歩きin横浜 Part 2

旧英国七番館

1922年に建設されたイギリスの貿易会社〈バターフィールド＆スワイヤ商会〉の横浜支社。1979年にその1/3ほどが残され、現在の名称に。数少ない関東大震災前の外国商館。

〒231-0023
神奈川県横浜市中区山下町7-1

「日米和親条約締結の地」記念碑

開港広場内にある、1854年の日米和親条約締結を記念して建てられた球体の石碑。周辺には、横浜開港資料館などの歴史的建造物や記念碑もあり、横浜開港の歴史を感じられるスポットとしてもおすすめ。

©横浜観光情報

〒231-0023
神奈川県横浜市中区山下町1
(開港広場内)

旧横浜居留地48番館

KAATの裏手に位置する横浜最古の煉瓦建築の洋館。紅茶やダイナマイトなどの取引を行っていたイギリス商人、J.P.モリソンの事務所兼住宅として使用されていた。関東大震災によって2階部分が崩壊したが、残りの一部は県指定重要文化財に指定された。横浜居留地時代唯一の煉瓦造りの遺構といわれている。

〒231-0023
神奈川県横浜市中区山下町54

横浜公園
(横浜スタジアム/R.H.ブラントンの胸像)

幕末の横浜を襲った火災をきっかけに生まれた居留外国人と日本人が共に使えた西洋式公園。1876年に開園され、設計者は英国人の土木技師R.H.ブラントン。公園内には胸像も建てられている。1929年には公園内に野球場がつくられ、スポーツのメッカとなった。戦後、球場は米軍に接収されたが、1952年に返還。現在は、〈横浜DeNAベイスターズ〉の本拠地としても一年中多くの人で賑わう場所。

〒231-0022 神奈川県横浜市中区横浜公園

横浜公園
©横浜観光情報

横浜スタジアム

ブラントンの胸像

インド水塔

山下公園内にあるモニュメント。19世紀の開港当初からインドとの交易があり、当時より山下町には多くのインド商人が暮らしていた。水塔は関東大震災で被災した在留インド人への支援に対するインド商組合からの感謝の気持ちとして建てられ、横浜市に寄贈された。

〒231-0023
神奈川県横浜市中区山下町279
(山下公園内)

※改修工事中のため利用不可。(2023年2月末まで予定)

たまくすの木
(横浜開港資料館)

横浜開港資料館の中庭にあるシンボルツリー。江戸時代からこの土地にあったといわれ、ペリー来航時の絵画にも登場している。その後、関東大震災などの度重なる災害も生き延びた、横浜を代表する名木。

〒231-0021
神奈川県横浜市中区日本大通3
(横浜開港資料館中庭)

QRコードから
MAPにとべるよ!

REVIEW

KAAT EXHIBITION 2022
鬼頭健吾展 | Lines

2022年5月1日(日) — 6月5日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈アトリウム〉

〈鬼頭健吾展 | Lines＋関連企画〉
山本卓卓　「オブジェクト・ストーリー」
5月1日(日) – 6月5日(日)
作・演出:山本卓卓

ケダゴロ　「『세월』クリエーション・ドキュメンタリー」
5月7日(土)
振付・構成・演出:下島礼紗

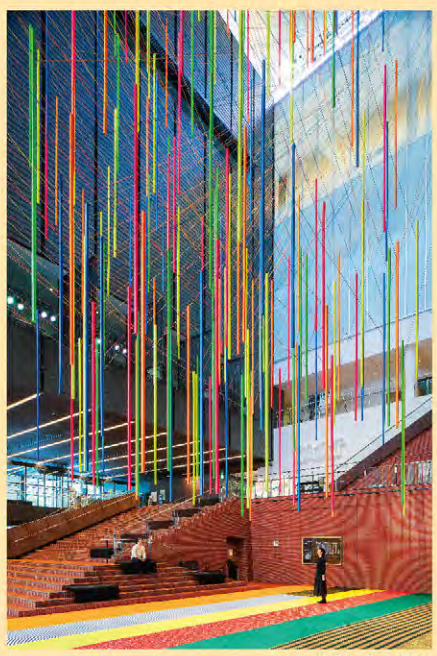
近藤良平　『新世界solo』
5月13日(金)・14日(土)
構成・出演:近藤良平

小尻健太　『Study for Self/portrait 2022』
5月20日(金)・21日(土)
構成・出演:小尻健太

感覚をひらく鮮烈な空間。

文=住吉智恵(アートプロデューサー)

2022年度プレシーズンの幕開け、アトリウムでは「KAAT EXHIBITION」が開催された。高さ約30mの開放感あふれる吹抜け空間で、このように誰もが直にアートを体験できる場を展開するのは初めての試みではないだろうか。2016年に始まった「劇場空間と現代美術の融合」を試みるシリーズの第7回となる本展。フラフープやスカーフといった日常的な素材を使った幻惑的な作品で知られるアーティスト鬼頭健吾が、無数のスティックがリズミカルに浮遊し、鮮烈な色彩が互いに呼応し合うインスタレーションをつくりあげた。



撮影=木暮伸也

ひと目でダイレクトに届き、感情を高揚させるその光景は、夜間も際立つネオンカラーを効かせたことも功を奏し、ガラス越しに日本大通りを歩く人たちを、あるいはSNSを通じて多くの人を魅了したはずだ。また館内のどこにいても視界に飛び込んでくる空間芸術ならではの異化効果は、アートになじみのない人を変に身構えさせることなく、心地よい刺激を与えたことだろう。さらにこの空間をベースに、山本卓卓のドラマ・インスタレーション、ケダゴロ、近藤良平、小尻健太によるパフォーマンスが行われた。シンプルなオブジェの反復と躍動、ヴィヴィッドな色と光がもたらすフィジカルな視覚体験は、ダンスや演劇の身体表現と絶妙の相性を見せた。今回特に強者揃いのダンサーたちが抱える情熱や内省、劇作家が密やかに呟く示唆に富んだ台詞の旨みを取り込んで、展示中のインスタレーションが新たに陰影や奥行きをまといはじめたことは思いがけない悦びだった。芸術監督・長塚圭史が目指す“劇場をひらく”取り組みがスムーズに滑り出した瞬間でもある。

KAATな人の行きつけ
《第3回》
英一番館
(神奈川県民ホール)

KAATの周辺は、食事や買い物、観光スポットが豊富な魅力的なエリア。そこで出演者やアーティスト、スタッフが足しげく通う、この街の“行きつけ”をご紹介します。

写真=石渡 朋

特製 ビーフギネスシチュー(税込)
¥2,750(ランチコース)　¥2,200(ディナー単品)　¥3,300(ディナープレート)

KAATから徒歩3分の場所にある《英一番館》。レストランの名前は、1871年、英国商社第一番目の建物として現在のシルクセンターにあった《ジャーディン・マセソン》に由来します。1975年に県民ホールの開業とともにオープンし、歴史ある街並みと横浜港を一望できる眺望と素材にこだわった料理で、ホールに来場した方や周辺の会社員に長く支持されている人気のレストランです。KAATスタッフのおすすめは《特製 ビーフギネスシチュー》。アイルランドの郷土料理ギネスシチューをもとに、牛肉をギネスビールで柔らかくなるまで煮込み、野菜の甘みが溶け込んだソースを絡めた絶品の一皿です。ティータイムやデザートには濃厚なバスク風チーズケーキも見逃せません。公演の日だけでなく特別な日のディナーにもぴったりのお店。お得なランチコースもあります。

英一番館
〒231-0023
神奈川県横浜市中区山下町3-1　神奈川県民ホール6F
☎045-662-5446
営業時間:年中無休※年末年始休業
11:30～14:00(ランチ) / 14:00～17:00(カフェ) /
17:00～21:00(ディナー / L.O 20:00)

長塚圭史の思いつき

これからのKAATを探るなら、そのヒントは長塚芸術監督の頭のなかにあるはず。そこで、今号制作の過程でつかんだ手応えや新しい発見について聞いてみました。

今号では脳科学者の中野信子さん、ジャーナリストの金平茂紀さんとの対談がありました。中野さんとの対話では、脳科学の観点から「忘却」について、さらに劇場や舞台芸術が人間にとっていかに重要かという視点まで、充実したお話しをいただきました。金平さんには、まずそのエネルギーに圧倒されましたが、現場に赴き、実体験することで、記憶を自分のものにする。さらに、取材先で負った心の傷を癒やすため、そして生きるために劇場を求めていらっしゃることも深く印象に残りました。お二人に共通していたのは好奇心です。知らないことを自分の目で確かめ、体験して、そこで得た知見を糧に、新しい対話へとつなげていく。今号では元町エスエス会の宝田さんにもお会いし、さまざまな取り組みを伺うこともできました。いろいろな業界の方からいただいた刺激を、KAATの新しい展開につなげていきたいと思っています。

※ご意見・ご感想をぜひツイッター・インスタグラムに「#kaatpaper」をつけて投稿してください。もしくはkouhou03@kanagawa-af.orgまでメールをお願いいたします。

KAATの新プロジェクト、「カイハツ」って何だ？

ただいま、KAAT準備中

KAATが2021年度より取り組んでいる「カイハツ」は、劇場が考える場、豊かな発想を生み出す場となることを目指し、クリエイションのアイディアを“カイハツ”する新しいプロジェクトです。新たな表現の実験、ジャンルを横断したアーティストの交流、さまざまな舞台芸術に関する情報の収集など、「企画・アイディアカイハツ」「戯曲カイハツ」「創作プロセスカイハツ」の3つを軸に、劇場の創造活動の核を育てるための活動を行っています。

「企画・アイディアカイハツ」として、振付家・伊藤郁女や劇作家・演出家の大池容子、演出家・田中麻衣子から提案された企画を実施し、上演を最終目的としないからこそ、俳優たちも新たな挑戦ができ、劇場も新しい才能に出会う機会となりました。「戯曲カイハツ」では、秋元松代の戯曲『七人みさき』をじっくり読み込んで作品への理解・戯曲へのリテラシーを深めました。「創作プロセスカイハツ」では、2022年度の新シーズン「忘」開幕に向けて、台本や演出プラン構想のために、オンラインヒアリングなどのワークショップを開催しています。2022年度も「戯曲カイハツ」、国際共同制作の試みのためのカイハツなど精力的に企画を実施しています。

KAATにとっても、長塚芸術監督にとっても、「カイハツ」は新しい挑戦です。1年が経過して、確かな手応えがつかめてきました。この「カイハツ」の様子は、KAAT PAPERでも少しずつ報告していきます。

神奈川へ、会いに 〈協同組合 元町エスエス会〉

〔第4回〕

長塚芸術監督が、今、気になっている街の人にふらっと会いに出かけます。
第4回は、KAATのご近所、元町ショッピングストリートの店主や経営者が集まり、街を盛り上げている〈協同組合 元町エスエス会〉の理事長・宝田博士さんを訪ねました。

写真＝西 あかり

長塚　KAATから徒歩ですぐなのですが、元町はまた雰囲気が違いますね。

宝田　中村川[*1]と、その上を通る高速道路が良くも悪くも境目になってしまっているかもしれません。でも、僕が小学生の頃は高速道路もなかったし、ひと続きの街だったんですよ。中華街に住んでいる友だちとよくドロケイをして遊んでいました。

長塚　開発によって街の風景が変わっていったんですね。

宝田　僕が生まれたのは、以前、KAATのあたりにあった「旧けいゆう病院」でした。近くには団地があり友だちとよく鬼ごっこをして遊んだり、今よりのんびりした雰囲気でした。

長塚　元町のあたりはどうでしたか。

宝田　うちの家業は〈タカラダ〉[*2]という明治15年から続く洋食器専門店ですが、小さい頃は「子どもは半ズボンで表通りを歩いちゃいけない」と言われるくらい、高級デパートのような街だったんです。その後、ハマトラブーム[*3]が来てだいぶにぎわいました。今も街を活性化させるために、「元町チャーミングセール[*4]」や貴重なクラシックカーが集まる「Classic Japan Rally」など、いろいろなイベントを企画しています。その一つが2018年から5回ほど開催した「STREET THE MUSICAL」です。メインストリートを舞台にして、総勢35～80名くらいの役者が、街を移動しながら一つの物語を上演します。観客の後ろから演者が飛び出してきたり、店舗の窓から紙吹雪を降らせてみたり、主催する僕らも楽しかったですね。今はコロナ禍で中断していますが、県内や東京からも大勢の方が足を運んでくださいました。

長塚　元町のお店は、開港からの歴史も含め、個性豊かなお店がたくさんありますね。

宝田　この街も関東大震災、戦災、大火事[*5]を経験しましたが、長く続くお店が多いんです。それぞれが専門店なのでプロフェッショナルな店主が多く、気軽に立ち寄っていただければ、きっと面白い話が聞けると思います。日本でこういう専門店街は珍しくなりました。非日常を味わっていただける唯一の街だと自負しています。KAATで観劇したり、中華街を訪れた人たちに、ぜひ足を延ばしていただきたいですね。

長塚　KAATからも徒歩で来られますし、何か一緒にやりましょう。

宝田　このメインストリートを使って、劇の予告編をつくってみてはどうでしょうか。何人か俳優さんにお越しいただいて、劇の冒頭部分だけ演じていただくとか。

長塚　それは面白い！元町に買い物に来たお客さんにもKAATのことを知ってもらえますね。僕らももっと街に劇場をひらいていこうと、いろいろな試みをしている最中なんです。ぜひご相談させてください。

宝田　元町で買い物をして、中華街で食事をして、KAATで演劇を観る。ぜひ、そういう流れをつくっていきましょう。

＊1 中村川:横浜市南区から中区に流れる河川。川の上には首都高速神奈川3号狩場線が走っており、中華街と元町を隔てている。　＊2 タカラダ:1882年創業。テーブルウェア専門店として、オリジナルから、国内外のテーブルウェア、インテリア、アンティークを取り揃える。　＊3 ハマトラブーム:横浜・元町に通う女子大生のファッションをモデルに、1970年代後半から1980年代にかけて巻き起こったブーム。元町のフクゾーのファッション、ミハマのシューズ、キタムラのバッグがハマトラの基本とされた。　＊4:元町チャーミングセール:1959年に始まった、元町商店街の恒例のセールのこと。　＊5 大火事:横浜港開港間もない1866年の豚屋火事など、何度か火災に見舞われ、復興にともない街が生まれ変わっている。

主催公演

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

ミュージカル『夜の女たち』

9月3日（土）－19日（月・祝）（ホール）

上演台本・演出：長塚圭史　音楽：荻野清子
出演：江口のりこ、前田敦子、伊原六花
前田旺志郎、北村岳子、福田転球
大東駿介、北村有起哉　ほか
チケット発売中

溝口健二監督映画「夜の女たち」を舞台化、
長塚圭史初のオリジナルミュージカル。

戦後間もない占領下の大阪釜ヶ崎を舞台に、夜の闇に堕ちていった女性たちが、必死に生き抜く姿を描いた物語。

≪メインシーズン「忘」プログラム≫

KAAT古典芸能シリーズ　つたえつなぐ

舞囃子『高砂』八段之舞
義太夫『源氏烏帽子折 伏見の里の段』

10月15日（土）（中スタジオ）

出演：鵜澤久、
竹本駒之助 ほか（出演順）
チケット発売中

日本の芸能を未来に“つたえつなぐ”、
KAATの新たな古典芸能シリーズ第一弾。

観世流シテ方能楽師の鵜澤久による舞囃子『高砂』、女流義太夫 人間国宝の竹本駒之助による素浄瑠璃『源氏烏帽子折 伏見の里の段』を上演。

『スカパン』

10月26日（水）－30日（日）（大スタジオ）

原作：モリエール『スカパンの悪巧み』
潤色・美術・演出：串田和美
出演：串田和美、大森博史、武居卓
小日向星一、串田十二夜、皆本麻帆、湯川ひな
細川貴司、下地尚子／小日向文世
チケット発売中

串田和美のライフワーク作品、
伝説のスカパンが還ってくる！

串田和美が独自の解釈と脚色で作り上げてきた名作『スカパン』を、80歳を迎える節目の2022年に小日向文世、大森博史ら、初演時にも出演したキャストが集結！

≪メインシーズン「忘」プログラム≫

KAAT×城山羊の会

『温暖化の秋 -hot autumn-』

11月13日（日）－27日（日）（大スタジオ）

作・演出：山内ケンジ
出演：趣里、橋本淳、岡部たかし、岩谷健司
東野絢香、笠島智、じろう（シソンヌ）
9/10（土）一般発売　9/3（土）KAme先行

劇作家・映画監督・CMディレクター、
〈城山羊の会〉を率いる山内ケンジ作品がKAATに初登場。

人間の本能や欲望を、絶妙なユーモアで描写する大人の会話劇で観客を魅了する山内ケンジ作品、初の神奈川県内での上演が実現。

≪メインシーズン「忘」プログラム≫

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

『ライカムで待っとく』

11月27日（日）－12月4日（日）（中スタジオ）

作：兼島拓也
演出：田中麻衣子
出演：亀田佳明、前田一世、魏涼子、あめくみちこ ほか
9/23（金・祝）一般発売　9/17（土）KAme先行

沖縄の新鋭作家・兼島拓也が放つ、
誰も読もうとしなかった、読まれなかった沖縄（こっちがわ）の物語。

1964年占領下で起きた米兵殺傷事件の犯人として逮捕された沖縄の青年達と、今を生きる青年達が交差する、沖縄の物語。

≪メインシーズン「忘」プログラム≫

〈チケット取り扱い・お問合せ〉
チケットかながわ　0570-015-415（10:00 ～ 18:00）

提携公演

- 快快（FAIFAI）『コーリングユー』
  https://www.kaat.jp/d/callingyou
- た組『ドードーが落下する』
  https://www.kaat.jp/d/dodosfreefall
- Co.山田うん『In C』
  https://www.kaat.jp/d/inc

KAAT　公演スケジュール　2022　AUTUMN

	8月26日（金）－ 9月4日（日）	快快（FAIFAI）『コーリングユー』	大スタジオ
忘	9月3日（土）－ 9月19日（月・祝）	KAAT神奈川芸術劇場プロデュース　ミュージカル『夜の女たち』	ホール
忘	9月7日（水）－ 9月16日（金）	ミュージカル『夜の女たち』関連企画　特別映画上映会	中スタジオ
	9月21日（水）－ 10月2日（日）	た組『ドードーが落下する』	大スタジオ
	9月23日（金・祝）－ 9月25日（日）	TOSHIKI KADOMATSU presents MILAD1　THE DANCE OF LIFE ~The beginning~	ホール
	9月26日（月）	KAATフレンドシッププログラム　「みんなのKAAT　バックステージツアー」	ホール
	9月30日（金）－ 10月1日（土）	K-BALLET Opto（オプト）「プティ・コレクション」―プティ・プティ・プティ！	ホール
	10月2日（日）	横濱JAZZ PROMENADE 30年記念／横浜音祭り2022連携事業　「たをやめオルケスタ with 土屋アンナ」	ホール
	10月3日（月）	KAATフレンドシッププログラム　「みんなのKAAT　バックステージツアー」	ホール
	10月5日（水）	舞台技術講座	大スタジオ
	10月8日（土）－ 10月9日（日）	『裸足で散歩』	ホール
	10月13日（木）－ 10月16日（日）	TAK in KAAT『YOKOHAMA 3 PIECES』	大スタジオ
	10月15日（土）	KAAT古典芸能シリーズ　つたえつなぐ　舞囃子『高砂』八段之舞／義太夫『源氏烏帽子折 伏見の里の段』	中スタジオ
	10月18日（火）－ 10月30日（日）	ブロードウェイ・ミュージカル『バイ・バイ・バーディー』	ホール
	10月21日（金）－ 10月23日（日）	Co.山田うん『In C』	大スタジオ
忘	10月26日（水）－ 10月30日（日）	『スカパン』	大スタジオ
忘	11月13日（日）－ 11月27日（日）	KAAT×城山羊の会『温暖化の秋 -hot autumn-』	大スタジオ
	11月21日（月）－ 11月27日（日）	宝塚歌劇月組　神奈川芸術劇場公演　ミュージカル・ロマンティコ『ELPIDIO（エルピディイオ）』～希望という名の男～	ホール
忘	11月27日（日）－ 12月4日（日）	KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『ライカムで待っとく』	中スタジオ
	11月28日（月）	KAATフレンドシッププログラム　「みんなのKAAT　バックステージツアー」	ホール

※情報は8月17日現在のものです。変更となる場合がございます。予めご了承ください。詳細は、各公演のウェブサイトをご確認ください。

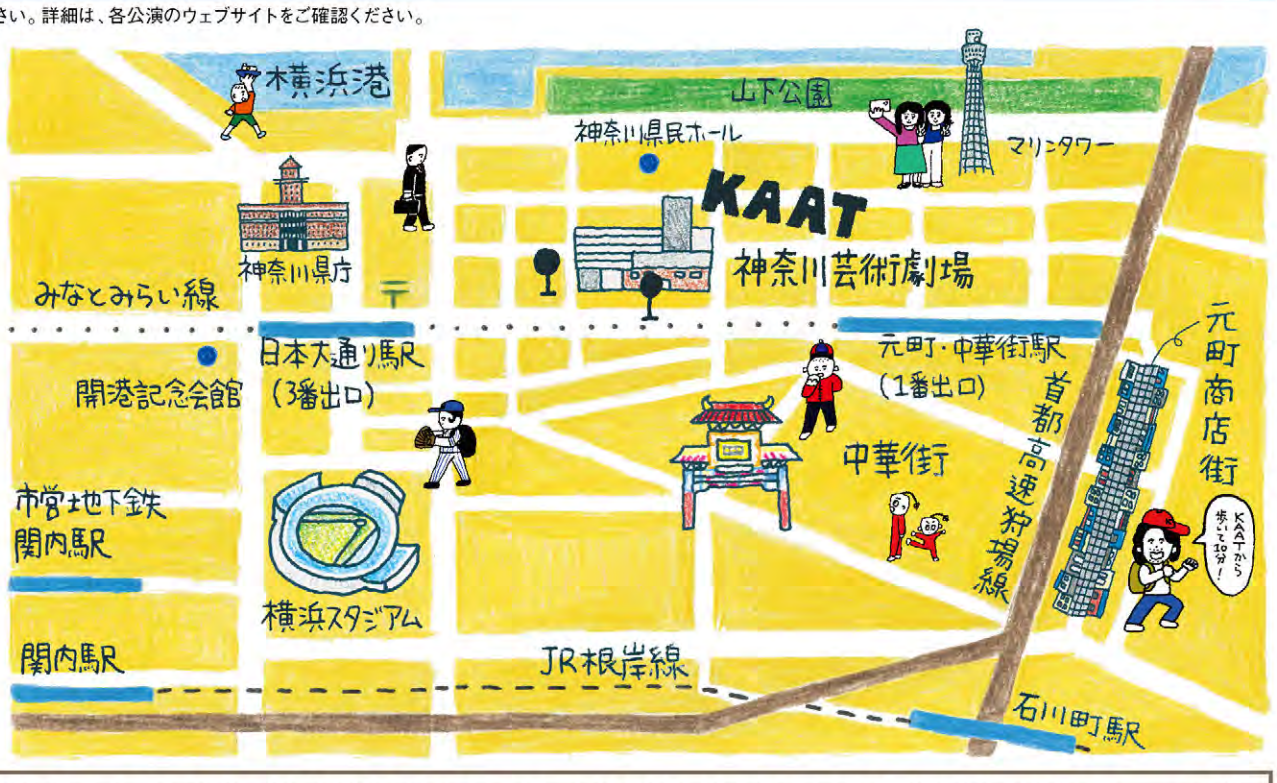
KAAT 神奈川芸術劇場

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL.045-633-6500（代表）FAX.045-681-1691
https://www.kaat.jp

- みなとみらい線：渋谷駅から東横線直通で35分！横浜駅から6分！
  日本大通り駅から徒歩約5分。元町・中華街駅から徒歩約8分。
- JR根岸線：関内駅または石川町駅から徒歩14分。
- 市営地下鉄：関内駅から徒歩14分。
- 市営バス：芸術劇場・NHK前すぐ。
  横浜駅前東口バスターミナル　2番のりば乗車（所要時間約25分）
  桜木町駅前バスターミナル　2番のりば乗車（所要時間約10分）
  ※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。
  ただし、148系統急行線を除く。
- 神奈川芸術劇場有料駐車場（65台）もご利用下さい。

指定管理者：（公財）神奈川芸術文化財団

KAAT神奈川芸術劇場では新型コロナウイルス感染症拡大予防対策を徹底し公演を実施します。ご来場前に必ず、劇場HPの「ご来場のお客様へのお願い」をご確認ください。



KAAT PAPER 読者アンケート

今後の紙面作りに活かすため、皆さまのご意見・ご感想をぜひお寄せください。アンケートにご回答いただいた方の中から抽選で、1組2名様にKAAT神奈川芸術劇場プロデュース『ライカムで待っとく』（作：兼島拓也、演出：田中麻衣子／ご招待日：11月29日（火）18:30開演の回）のチケットをプレゼントいたします。
※チケットプレゼント応募期限：10月31日（月）　※厳選なる抽選の上、当選者の発表はメールでのご連絡をもって代えさせていただきます。

季刊誌 神奈川芸術劇場 KAAT PAPER 秋号（年4回発行）　2022年8月31日発行　発行=KAAT神奈川芸術劇場　編集=伊藤総研（伊藤総研）、原田菜央（伊藤総研）、松田美保　編集協力=及位友美（voids）　アートディレクション=高田 唯（Allright）　デザイン=齋藤拓実（rough）　デザインコーディネート=高田 舞（Allright）　イラストレーション=ひだかもと　表紙イラストレーション=芳賀あきな